



青森県代表のJA相馬村が最優秀賞を受賞

「飛馬ふじ」栽培基準確立と普及への取組事例を発表

平成29年度 JA指導実践 北海道・東北ブロック大会



力強く発表し、飛馬ブランドを多くの人にアピール

JAと農家組合員の強い結びつきが評価される

11月30日、福島県郡山市で北海道・東北農業対策協議会主催の平成29年度「JA営農指導実践 北海道・東北ブロック大会」が開催され、青森県代表として選ばれた当JA農業振興課 三上拓哉が「飛馬ふじ」の取組について発表し、最優秀賞に輝いた。

全国に伝えたい

JA相馬村の取組事例

今大会で最優秀賞に輝いた発表内容を一部紹介したいと思う。

飛馬ふじく飛馬りんご牽引役を目指して、

「むつ」の衰退を機にリンゴ生産販売戦略を策定

JA相馬村は、全国的に見ても小規模なJAでありながらもリンゴ販売品販売高は36億円、共販率が90%以上とリンゴに特化したJAとして注目を集めている。

現在の飛馬ブランド確立に至るまで、主力品種であった「むつ」の栽培が管内農家組合員の営農基盤の中心であったものの、昭和50年代に入ると国内経済の低迷と共に「むつ」の消費が衰退し、管内の「むつ」の入庫数量も激減した。衰退の要因としては、景気の低迷

Special News



津軽弁で会場を沸かせた一面もあった



最優秀賞受賞とともに、全国大会出場へ



営農指導員が重点的に個別巡回し、究極の味を実現

をはじめとし、生産面では生産資材の高騰、消費面では消費者のニーズが「見た目重視」から「味重視」、「大玉」から買い求めやすい「中玉」に移行したことなど外部要因が大きかった。

当JAは、この危機的状況を打開するために「りんご生産販売戦略」を策定し、農家の所得確保に向けて「究極のサンふじ＝飛馬ふじ」を新たな主力品種として位置づけ、新たなブランド展開に向かった。

—「本物志向」で品質の線引き—
JAと地元ベテラン農家らのみ

ならず、関係機関を含めたプロジェクトチームを立ち上げ、生産・流通・販売までの取組方針について本音でぶつかり合った。「見た目も味も良い、本物志向の究極のサンふじ」を実現させるため栽培法を模索した。

葉摘みや収穫時期にスポットを当てただけでなく、土づくりからこだわって良品生産に結び付けようとJAがリーダー性を発揮し、栽培技術の高位平準化を目指した。3年間にわたり、生産者・市場関係者・JAなどが一体となった試験栽培の末、飛馬ふじの栽培基準

は出来上がった。また、糖度についても14度以上を保証して販売することとし、基準値まで糖度が上がっていることを指導員が確認した上で収穫を促すことにした。

—むっづの後継者として、飛馬ふじが主力商品へ—

JAの主導で適正な栽培基準に取組んだ結果、消費者からの評価を得て販売高が伸長し、生産者への所得向上へと繋がった。飛馬ふじ。平成22年産以降、販売価格は常に平均単価5,000円以上をキープし、以前の「むっづ」並みの高価格帯を維持している。これは、宅配やギフトに絞った販売で重点を置くことで、取引価格が固定され相場に左右されない強みとなり、現在の飛馬ふじが確立された。

—全国大会に向けて—

今回の発表を通じて、飛馬ブランドを再構築する取組みが評価され、我々の自信にも繋がった。組合員の皆さんと一緒に育ててきたこの取組を全国の皆さんに発信してきたと思いますので、応援よろしく願います。